都にはまた、「高倉宮、園城寺へ入御の時、南都の大衆、同心して、あまっさへ御むかへに参る条、 これもって朝敵なり。されば南都をも三井寺をも攻めらるべし」といふ程こそありけれ、奈良の大衆おびたたしく蜂起す。摂政殿より、「存知の旨あらば、いくたびも奏聞にこそ及ばめ」と仰せ下されけれども、一切用ゐ奉らず。有官の別当忠成を御使に下されたりければ、「しや乗物よりとってひきおとせ。もとどりきれ」と騒動する間、 忠成色をうしなッて逃げ上る。次に右衛門佐親雅を下さる。これをも、「もとどりきれ」と大衆ひしめきければ、とる物もとりあへず逃げ上る。その時は勧学院の雑色二人がもとどり切られにけり。

また南都には大きなる毬杖の玉をつくって、これは平相国のかうべとなづけて、「うて」 「ふめ」なんどぞ申しける。「詞のもらしやすきは、わざはひをまねく仲立ちなり。事のつつしまざるは、やぶれをとる道なり」といへり。この入道相国と申すは、かけまくもかたじけなく、当今の外祖にておはします。それをかやうに申しける南都の大衆、およそは天魔の所為とぞ見えたりける。

入道相国かやうの事ども伝へ聞き給ひて、いかでかよしと思はるべき。かつがつ南都の狼藉をしづめんとて、備中の国の住人、瀬尾太郎兼康、大和国の検非所に補せらる。兼康、五百余騎で南都へ発向す。「相構へて衆徒は狼藉をいたすとも、汝等はいたすべからず。物具なせそ。弓箭な帯しそ」とて向けられたりけるに、大衆かかる内儀をば知らず、兼康が余勢六十余人からめとって、一々にみな頸を斬って、猿沢の池のはたにぞ懸け並べたる。

入道相国大きにいかって、「さらば南都を攻めよや」とて、大将軍には頭中将重衡、副将軍には中宮亮通盛、都合其勢四万余騎で、南都へ発向す。大衆も老少きらはず、七千余人、甲の緒をしめ、奈良坂、般若寺、二ヶ所の路を掘り切って、堀ほりかいだてかき、逆茂木ひいて待ちかけたり。平家は四万

余騎を二手にわかッて、奈良坂、般若寺二ヶ所の城郭に押し寄せて、時をどッとつくる。大衆はみな徒歩立打物なり。官軍は馬にて駆け回し駆け回し、あそこここに

都ではまた「高倉宮（以仁王）が園城寺（三井寺）にお入りになったとき、南都の大衆が味方して、おまけに宮を迎えに行ったこと、これは朝廷への反抗だ。〔清盛は〕南都も三井寺も攻めるにちがいない」という噂が聞こえてくるやいなや、奈良（南都）の大衆がいっせいに反発して立ち上がった。

摂政殿は「思うことがあれば何度でも帝に申し上げるから」とおいいつけになったが、全く聞きいれない。勧学院の別当忠成を使者として奈良に行かせたところ、「奴を乗物から引きずり落とせ。もとどりを切れ」と騒いだので、忠成は青ざめて京に逃げ帰る。次に右衛門佐親雅を奈良に行かせる。これも、「もとどりきれ」と大衆が騒ぎ立てるので、とる物もとりあえず京に逃げ帰る。その時は勧学院の下級役人二人がもとどりを切られてしまった。

また南都では、大きな毬杖の玉をつくり、これは平相国（清盛）の頭といって、「打て」「踏め」などといった。「人の噂になりやすい悪口は、災いの元。調子に乗りすぎるのは破滅の元」という。入道相国と申すのは、恐れ多くも今の帝の祖父である。それをこのように申す奈良の僧たちは、まったくもって天魔が取りついたかと思われた。

入道相国はこのような事を伝え聞いて、そのままにしておくわけがない。急いで南都の狼藉を鎮めようと思って、備中国住人瀬尾太郎兼康を大和国の検非所（県警本部長）にした。兼康は五百余騎で南都に向かう。〔清盛は〕「よいか、衆徒が乱暴をはたらいても、おまえたちは決して乱暴するな。武装するな。弓矢は持つな」と言って向かわせたのに、大衆はそのような内情を知らずに、兼康の部下六十人あまりを捕らえて、全員の頸を斬り、猿沢の池の周りに並べて掛けた。

入道相国は激しく怒り、「そうか、では南都を攻めよ」と言って、大将軍には頭中将重衡、副将軍には中宮亮通盛、総勢四万余騎で南都に向かう。大衆も、老いも若きも七千人あまりが、甲の緒をしめ、奈良坂、般若寺、二ヶ所の道を横切る堀を作って、深く掘り垣を作り逆茂木を置いて待っている。平家は４万騎あまりを二手に分け、奈良坂、般若寺、二ヶ所の砦に押し寄せてどっと鬨の声を上げた。大衆はみんな徒歩、長刀で戦う。官軍は馬で駆け回り駆け回り、あちこちで追いかけ追い

追っかけ追っかけ、さしつめひきつめ、さんざんに射ければ、ふせぐところの大衆、数を尽くいて討たれにけり。卯の刻に矢合して、一日戦ひ暮らす。夜に入ッて奈良坂、般若寺二ヶ所の城郭ともに敗れぬ。

夜いくさになッて、暗さは暗し、大将軍頭中将、般若寺の門の前にうっ立って、「火をいだせ」とのたまふ程こそありけれ、平家の勢のなかに、播磨の国の住人、福井庄の下司、二郎大夫友方といふ者、楯を割り、松明にして、在家に火をぞかけたりける。

十二月廿八日の夜なりければ、風は激しし、火元は一つなりけれども、吹きまよふ風に、おほくの伽藍に吹きかけたり。恥をも思ひ、名をも惜しむほどの者は、奈良坂にて討ち死にし、般若寺にして討たれにけり。行歩にかなへる者は、吉野十津川の方へ落ちゆく。歩みもえぬ老僧や、尋常なる修学者、児ども、女、童部は、大仏殿の二階の上、 山階寺のうちへ我先にとぞ逃げゆきける。大仏殿の二階の上には、千余人登りあがり、敵の続くを登せじと、橋をば引いてんげり。猛火はまさしう押しかけたり。をめき叫ぶ声、焦熱大焦熱、無間阿毘のほのほの底の罪人も、これには過ぎじとぞ見えし。

興福寺は淡海公の御願、藤氏累代の寺なり。東金堂におはします仏法最初の釈迦の像、西金堂におはします自然涌出の観世音、瑠璃をならべし四面の廊、朱丹をまじへし二階の楼、九輪空にかかやきし二基の塔、たちまちに煙となるこそ悲しけれ。東大寺は常在不滅、実報寂光の生身の御仏とおぼしめしなずらへて、聖武皇帝、手づから身づからみがきたて給ひし、金銅十六丈の盧遮那仏、烏瑟高くあらはれて、半天の雲にかくれ、白毫新たに拝まれ給ひし、満月の尊容も、御髪は焼け落ちて大地にあり。御身はわきあひて山のごとし。八万四千の相好は、秋の月はやく五重の雲におぼれ、四十一地の瓔珞は、夜の星むなしく 十悪の風にただよふ。煙は中天に満ち満ち、ほのほは虚空にひまもなし。まのあたりに見奉る者、 さらにまなこをあてず。はるかに伝へ聞く人は、肝たましひを失へり。

法相、三論の法門聖教すべて一巻残らず。我朝はいふに及ばず、天竺震旦にもこれ程の法滅あるべしともおぼえず。優塡大王の紫磨金をみがき、毘須羯磨が赤栴檀

かけ、弓をさしつめひきつめ、さんざんに射たので、防戦一方の大衆は、壊滅してしまった。午前 5 時に矢合して、一日中戦う。夜に入って奈良坂、般若寺二ヶ所の城郭はともに敗れた。

夜いくさになって、あたりが暗くなり、大将軍の頭中将重衡が、般若寺の門の前にすっくと立ち、「火をつけよ」と言うやいなや、平家の軍勢のうち播磨国住人、福井庄下司、二郎大夫友方という者が、楯を割り、松明にして、民家に火をつけたのだった。

12 月 28 日の夜だったので、風は激しかったし、火元は一つだったが、吹きまよふ風が、多くの伽藍に火の粉を吹きかけた。恥を知り、名声の傷つくことを惜しむ者は、奈良坂で討ち死にし、般若寺で討たれてしまった。自分で歩ける者は、吉野十津河の方へ逃げていく。歩けない老僧や、まじめに学問する者、児たち、女こどもは、大仏殿の二階の上や、山階寺の中に我先に逃げたのだった。大仏殿の二階の上には、1000 人あまりが登り、敵をあとから登らせまいと、橋を引きあげてしまっていた。猛火は現実に迫っている。わめきさけぶ声、焦熱大焦熱、無間阿毘の炎の底の地獄の罪人も、これほどまでひどくはないだろうと思えた。

興福寺は淡海公（藤原不比等）の願によって建立された、藤原氏累代の寺である。東金堂におわす仏法最初の釈迦の像、西金堂におわす土の中から現れた観世音、瑠璃をならべた四面の廊、朱丹をまじえた二階の楼、九輪が空にかがやいていた二基の塔が、たちまち煙となるのはじつに悲しいことだ。東大寺は常在不滅、実報寂光の生身の御仏になぞらえて、聖武天皇がご自身の手でみがかれた、金銅十六丈の盧遮那仏、烏瑟高く現れて半天の雲にかくれ、白毫がはっきりと拝める、満月のように完全円満のお姿が……御髪は焼け落ちて大地にある。御からだは高熱で溶けて山のよう。八万四千の相があるという仏のお姿は、秋の月のように、早々と五重の雲に隠れ、四十一地の瓔珞は、夜の星のようにむなしく十悪の風にただよう。煙は中空に満ち満ちて、炎は虚空を埋め尽くす。目の前で見ている者は、まともに見つめることができない。この惨状を遠くで伝え聞く人は、平静を失った。

法相、三論の法門聖教は一巻残らず燃えた。わが国は言うに及ばず、天竺震旦にも、これ程の仏法の滅亡があるとは思えない。優塡大王が紫磨金をみがき、毘須羯磨が赤栴檀を刻んだ

をきざんじも、わづかに　等身の御仏なり。況んやこれは、南閻浮提のうちには唯一無双の御仏、ながく朽損の期あるべしともおぼえざりしに、いま毒縁の塵にまじはって、久しく悲しみを残し給へり。梵尺四王、竜神八部、冥官冥衆も驚きさわぎ給ふらんとぞ見えし。法相擁護の春日の大明神、　いかなる事をかおぼしけん、されば春日野の露も色かはり、三笠山の嵐の音、怨むる様にぞ聞こえける。

ほのほの中にて焼け死ぬる人数を記いたりければ、大仏殿の二階の上には一千七百余人、山階寺には八百余人、或る御堂には五百余人、或る御堂には三百余人、つぶさに記いたりければ、三千五百余人なり。戦場にして討たるる大衆千余人、少々は般若寺の門の前にきりかけ、少々は持たせて都へのぼり給ふ。

　二十九日頭中将、南都ほろぼして北京へ帰り入らる。入道相国ばかりぞいきどほりはれてよろこばれける。中宮、一院、上皇、摂政殿以下の人々は、「悪僧をこそ滅ぼすとも、伽藍を破滅すべしや」とぞ御歎きありける。衆徒の頸ども、もとは大路を渡して、獄門の木に懸けらるべしと聞こえしかども、東大寺、興福寺のほろびぬるあさましさに、沙汰にも及ばず。あそこここの溝や堀にぞ捨ておきける。

聖武皇帝、宸筆の御記文には、「わが寺興福せば天下も興福し、わが寺衰微せば天下も衰微すべし」とあそばされたり。されば天下の衰微せん事も疑ひなしとぞ見えたりける。あさましかりつる年も暮れ、治承も五年になりにけり。

のも、わずかに等身の御仏である。ましてやこの東大寺の大仏は、南閻浮提のうちには唯一無双の御仏、永遠に朽ち損なわれることはないと思っていたのに、いま毒縁の塵に交わり、長い悲しみをお残しになった。梵天、帝釈、四天王、竜神、八部衆、冥官冥衆も驚き騒いでいると思われる。法相宗を擁護する春日の大明神も、どのようなことをお思いになったのか、春日野の露も色が変わり、三笠山の嵐の音も怨んでいるように聞こえた。

炎の中で焼け死んだ人数を記すと、大仏殿の二階の上には 1700 人あまり、山階寺には 800 人あまり、ある御堂には 500 人あまり、ある御堂には 300 人あまり、詳細に記すと、3500 人あまりである。戦場で討たれた大衆 1000 人あまりのうち、少しは般若寺の門の前に頸を斬って掛け、少しは頸を持たせて都へ帰った。

（12 月）29 日、頭中将重衡は南都を滅ぼして帰京した。入道相国ただ一人、遺恨が晴れて喜んだ。中宮、一院、上皇、摂政殿以下の人々は、「悪僧を滅ぼすのはしかたないとしても、伽藍を破滅させるなどあってはならないことだ」と嘆き合った。衆徒の頸は、はじめは大路を渡して、獄門の木に懸けるといわれていたが、東大寺、興福寺が滅んでしまった衝撃で、なんの指図もない。あちこちの溝や堀に捨ておいた。

聖武天皇御自筆の書には、「わが寺が興福すれば天下も興福し、わが寺が衰微すれば天下も　きっと衰微するだろう」とお書きになっている。天下が衰微する事は疑いなしと思われた。驚きあきれることばかりの年も暮れ、治承も五年になった。

© 2022　nozawa chikako　無断転載を禁ず